AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:18-26.

模擬患者を用いた面接演習による学生の学びの構造― 質的統合法による実習前後の比較―

一條 明美, 神成 陽子, 綱元 亜依, 升田 由美子

投稿論文

模擬患者を用いた面接演習による学生の学びの構造
― 質的統合法による実習前後の比較 ―

一　條　明　美、神　成　陽　子、綱　元　亜　依
升　田　由美子

【要　旨】

本研究の目的は模擬患者を活用した面接演習（以降SP参加型演習とする）が学習に及ぼした影響を演習直後と臨地看護学実習後に調査し、学生の学びの構造を明らかにすることである。

対象は研究協力に同意があった看護系大学２年生の記述、演習直後44名（回収率74.6％）、実習後26名（回収率44.1％）である。学生による記述を質的統合法で分析した。

看護過程の講義にSP参加型演習を取り入れ、紙上事例の患者をSPが演じ、情報収集の面接を実施した。演習は代表学生がSPと面接し、他の学生は学生同士でロールプレイを実施した。学生はSP参加型演習後、SPが存在することの緊張感、リアリティさにより、臨床や将来をイメージでき学習意欲が向上した。実習後は、普段と異なる学習環境が波及し、実習で意図的なコミュニケーションができた一方、受け持った患者とSPとの違いに気づいた。

【キーワード】

看護学生、模擬患者演習、看護学実習、質的統合法（KJ法）

【緒　言】

模擬患者は1975年に日本に紹介され、医学教育で取り入れられた。現在では看護教育、薬剤師教育等コメディカルの教育にも導入されている。模擬患者には学習者の臨床技能評価のために演技が標準化された標準模擬患者（standardized patient）と学習者の練習のために授業や実習に参加し、シナリオに基づいて役柄を演じる模擬患者（simulated patient）がある。前者は医学教育等で行われているOSCE（objective structured clinical examination：客観的臨床技能試験）など評価を目的として用いられている。後者は面接等の講義演習で活用され、シナリオに準じて患者を演じ、終了後に学習者にコミュニケーション等に関してフィードバックを行う[1]。学生は模擬患者とコミュニケーションの実践のほかにフィードバックを受けることで、自らの医療者としての能力について考えるプロセスが学びとなる。

模擬患者（以降、SPとする）は一定の訓練を受けた一般市民が患者の役割を担い、その養成はNPOや大学等教育施設で行われている。研究者が所属する施設では、2011年よりSP養成を開始し、講義演習で活用している。

我々は、看護過程の講義演習の中で紙上事例の患者をSPに演じてもらい、情報収集の演習を実施している。学生が初めて患者を受け持つ実習でよりよい看護実践ができることを期待してプログラムしている。模擬患者を活用した面接演習（以降、SP参加型演習とする）の具体的な学習効果を構造的に分析することで、より効果的な面接演習に関する示唆が得られると考え

旭川医科大学

る。

【目　的】

模擬患者を活用した面接演習が学習に及ぼした影響を演習直後と臨地看護学実習後に調査し、学生の学びの構造を明らかにする。

【方　法】

1．対象

看護系大学２年生でSP参加型演習に出席した学生59名にアンケート調査を行い、得られた記述である。回答は演習後が44名（回収率74.6％）、実習後は26名（回収率44.1％）であった。

2．データ収集場所と期間

データ収集場所はB看護系大学で、期間はSP参加型演習後の2013年９月と初めて患者を受け持つ臨地看護学実習（以降、実習とする）終了後の2014年１月

3．データ収集方法

SP参加型演習に出席した看護系大学２年生に演習後無記名自記式、留め置き法による「SPを活用した演習に関するアンケート」調査を実施した。アンケートの内容は、1）SPとの面接の有無、2）SP参加型演習の良かった点、3）SP参加型演習の悪かった点・改善点、4）SP参加型演習が学習にどのような影響を及ぼしたか、5）SP参加型演習は全体として満足できたか（5件法）、6）5）の回答理由とした。

次に初めて患者を受け持った実習後に1）演習でのSPとの面接の有無、2）SP参加型演習が実習に役立ったか（5件法）、3）2）の理由を自由記述式で回答を求めた。

SP参加型演習の内容を**表１**に示す。演習は、看護過程論（２単位30時間）のうち２コマで実施した。面接は受け持ち患者から情報収集する場面とし、学生はあらかじめ情報収集する内容や方法を学習し演習に参加した。グループ内で学生同士が患者役となり、情報収集のロールプレイを実施した。その中で各グループ１回SPに対して面接を行った。SPには学生が看護過程を展開した紙上事例をシナリオとして演じてもらった。SPは研究者が所属する教育機関で一定の訓練を受けた者である。

4．分析方法

アンケートの回答のうち、SP参加型演習後の満足度、実習での役立ち度は単純集計した。SP参加型演習後の「SP参加型演習が学習にどのような影響を及ぼしたか」の記述と実習後の「SP参加型演習が実習で役立った理由」をデータとし、質的統合法で分析した。

質的統合法は、データの示す意味に注目し意味の類似性に基づきデータを統合し現象の全体像が構造化さ

表１　SP参加型演習の概要

科　　目	「看護過程論」（２単位　30時間）
学習スケジュール	１．２コマ：看護実践としての看護過程 ４～７コマ：情報・アセスメントとは何か ８コマ：看護問題とは何か ９コマ：看護目標とは何か 10コマ：看護計画立案 11コマ：評価とは何か 12～28コマ：グループワークによる紙上事例の看護計画立案 29．30コマ：面接演習―情報収集のロールプレイ
対　　象	看護系大学２年生（臨地看護学実習で患者の受け持ち経験がない）
方　　法	紙上事例の看護計画を立案し、情報を収集する設定でロールプレイを行う。
	１．目的：自己のコミュニケーションの傾向を知る。 インタビューの進め方、開いた質問、閉じた質問の使い方を知る。 ２．３～４名１グループとなり、患者役・実施者・観察者（２名）をおいて、全員がロールプレイを実施する。ロールプレイ後、実施者は自己評価を発表し、観察者および患者役はフィードバックし、インタビューの進め方についてディスカッションを行う。 ３．各グループ４回のロールプレイのうち、１回は模擬患者が患者役となり、代表学生がインタビューを行う。模擬患者が参加するロールプレイには教員が同行し、ロールプレイ後ファシリテータを行う。 ４．終了後、演習を通しての学びをレポートする。

れ、描写される方法である[2]。以下に分析の手順を示す[3]。

1）記述されたデータが一つの文脈になるように素材を単位化し、ラベルを作成した。

2）ラベルを繰り返し読み意味内容が似たものを集めグループ化し、それらのラベルが意味するところを一文で表し表札を付けた。表札はグループ化されたラベル全体を１つと捉え表現し、新たな意味を形成させたラベルとなる。

3）2）でグループ化され表札がつけられた新たなラベルおよび１回目で集められなかったラベルを類似性に基づきグループ化および表札付けの工程を繰り返し行った。

4）グループ化ができない段階まで 3）を繰り返し、最終的にグループ化されたラベルをラベル間の関係性に基づき図解化し、見取り図を作成した。

5）図解化したラベル間の関係を示す関係記号と添え言葉を用いて、ラベル同士の関係性を構造化した。

6）最終ラベルの意味内容を端的に表現し（シンボルマーク化）、図解を叙述した。

分析は、看護質的統合法研修を受講した看護教員４名で行った。

5．倫理的配慮

研究対象者は研究者の所属する施設の学生であることから、以下の倫理的配慮を行った。

調査依頼は、文書と口頭で研究者以外の教員が行い、1 ～ 3 について説明した。

1．研究協力は個人の意思であること、協力の有無が成績評価等に一切関係しないこと、調査票の提出をもって研究協力の同意を得たと判断する。

2．調査票の回収は第三者が行い、筆跡等で個人が特定されないよう電子化し、研究終了後はシュレッダーで裁断処理する。

3．得られたデータは研究目的外では使用しない。また、不明な点に関する質問には必ず答える。

調査票の回収は研究に関係しない職員が行い、回収後直ちに電子化した。

【結　果】

1．SP 参加型演習後

回答が得られた 44 名のうち、演習の満足度は、大変満足 18 名（41.0%）、満足 24 名（54.5%）、どちらともいえない２名（4.5%）であった。それぞれの SP 面接体験者、見学者に内訳は**表 2** に示す。

SP を活用した演習が学習にどのような影響をおよぼしたかに関する記述は、35 のラベルがあった。

これを質的統合法で分析した結果、以下のような結果が得られた。見取り図を**図 1** に示す。見取り図を基に SP 参加型演習が学習におよぼした影響について全体像を述べる。最終ラベルのシンボルマークを『　』、最終ラベルを「　」で示す

SP 参加型演習では、『緊張感』と『実習に活かせるリアリティさ』という二つの影響があった。学生は「学生ではない方に看護を行うことで緊張感を持って演習に臨むことができ良い学びになった」、「ほかの学生が行っているのを見て、とても現実味があり、勉強になった」と感じていた。すなわち学生が患者役となるいつもの演習と比較して SP が存在することが現実的であり、緊張感が生れた。この緊張感がさらにまた現実味を与え互いに影響をもたらした。

この２つの『演習の影響』に支えられて、学生は「上手に患者役を行える人はそれだけ患者さんのこと

表 2　SP 参加型演習後の満足度　　n=44（%）

SP 面接	大変満足	満足	どちらともいえない	やや不満足	不満足
体験者（n= 7）	5（11.4%）	2（4.5%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
見学者（n=37）	13（29.5%）	22（50.0%）	2（4.5%）	0（0.0%）	0（0.0%）
計	18（40.9%）	24（54.5%）	2（4.5%）	0（0.0%）	0（0.0%）

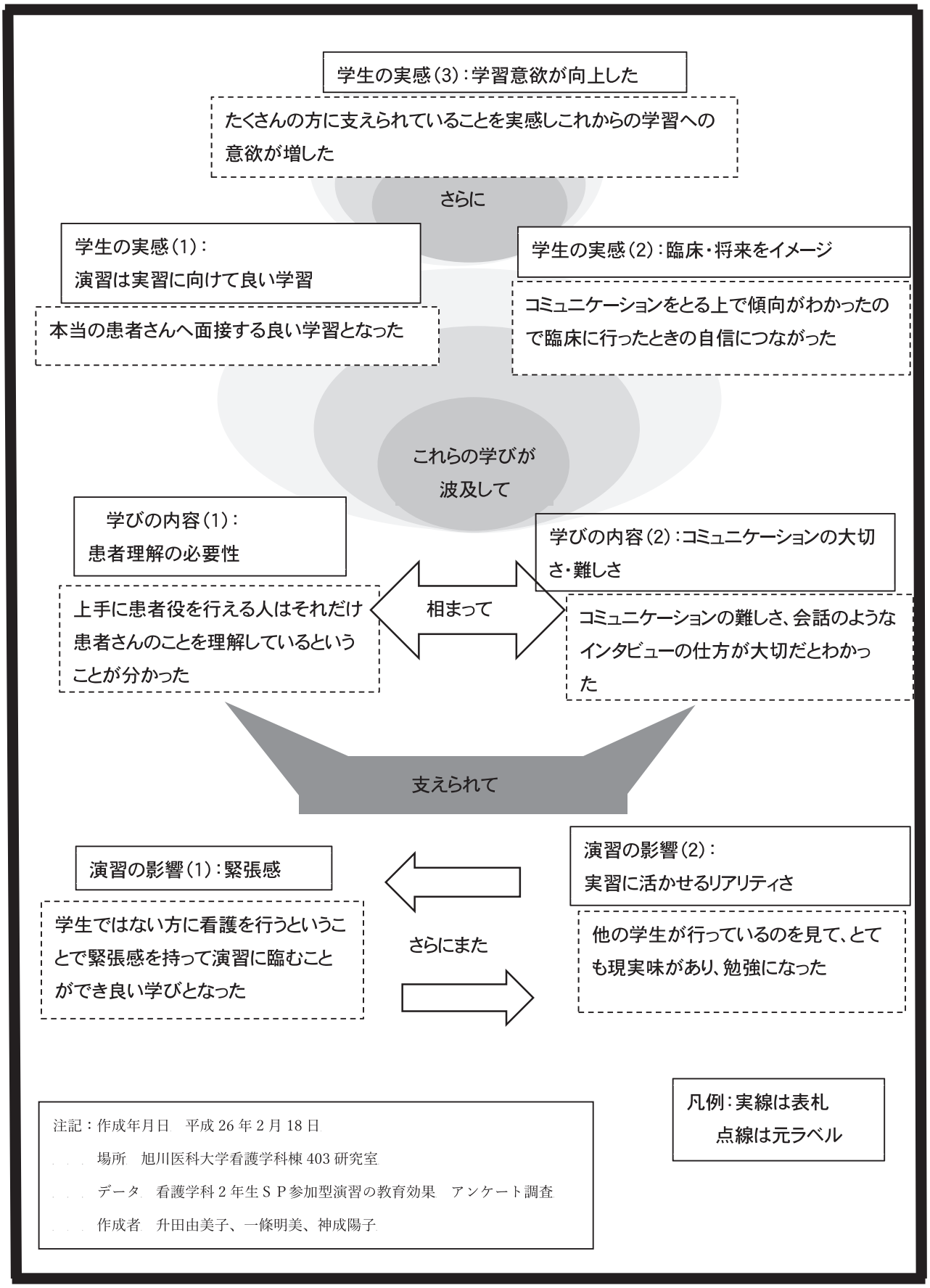

図 1　模擬患者を活用した面接演習が学習におよぼした影響

を理解していることが分かった」と『患者理解の必要性』、「コミュニケーションの難しさ、会話のようなインタビューの仕方が大切だと分かった」と『コミュニケーションの大切さ・難しさ』、これら２つの学びを得た。この学びが波及し、『演習は実習に向けてよい学習』『臨床や将来をイメージ』できたと実感し、さらに「たくさんの方に支えられていることを実感」し『学習意欲が向上』した。

２．初めて患者を受け持った実習後

初めて患者を受け持った実習後の調査結果を述べる。回答した学生 26 名のうち、実習後に SP 参加型演習が実習に大変役立ったと回答した学生は６名（23.1%）、役立った 13 名（50.0%）、どちらもともいえない６名（23.1%）であった。それぞれの SP 面接体験者、見学者の内訳は**表３**に示す。

実習後の見取り図を**図２**に示す。SP 参加型演習が実習に役立ったか否かの理由が記述されたラベルは 26 であった。演習後と同様に、最終ラベルのシンボルマークを『　』、最終ラベルを「　」で示し、SP 参加型演習が実習に役立った理由の全体像を述べる。

学生は SP 参加型演習を通して「必要な情報を得るためのコミュニケーションの具体的な方法」を『クループでの意見交換からのコミュニケーションの方法や工夫についての学び』を得ていた。また「模擬患者の演習は面接のイメージができ面接をしても見学しても意図的コミュニケーション、情報収集とその準備に役立った」と『役に立った面接』を認識していた。この二つが互いに影響しあった結果、「模擬患者と面接することで実習でも落ち着いて意図的なコミュニケーションができた」と『実習で達成できたこと』を認識していた。

一方、「実際の受け持ち患者と模擬患者は異なる」と『演習では気づかなかった実際の患者との違い』に気づき、学生にとって『役立ったかわからない面接』であった。しかし、面接が役立ったと認識した学生もそうでない学生も「全員が体験する、いろいろな人と面接する」など『効果的な面接の提案』をしていた。これは『普段の学習環境と SP を活用した学習環境の違い』が「学生同士とは異なる模擬患者を活用した学習環境は緊張感があり、より実践に近い学び」が波及した結果である。

【考　察】

１．学習環境と学習方法からの影響

SP 参加型演習では、学生全員が SP と面接することはできない。学生は３～４人のグループとなり、代表学生が SP と面接し他のメンバーが見学した。その後、学生同士が患者役となり面接演習を実施した。

SP 参加型演習後では、『緊張感』と『実習に活かせるリアリティ』という二つの『演習の影響』があった。SP を活用することの利点としてリアリティがあること、フィードバックが受けられることがあげられる。学生は演習の中で全員がロールプレイでインタビューを体験するが、SP にインタビューができる学生は限られている。しかし、SP との面接を体験した学生もそれを見学した学生も「模擬患者に看護を行うことで緊張感を持って演習に臨むことができ良い学びになった」、「ほかの学生が行っているのを見て、とても現実味があり、勉強になった」と SP へのインタビューの有無にかかわらず、SP から影響を受けていることがわかる。

これらの『演習の影響』に支えられて、『患者理解の必要性』と『コミュニケーションの大切さ・難しさ』を学んでいた。学生は、看護計画を立案した紙上事例

表３　SP 参加型演習の実習への役立ち度　　n=26（%）

SP 面接	大変役に立った	役に立った	どちらともいえない	あまり役に立たなかった	役に立たなかった	無回答
体験者（n= 5）	3（11.5%）	2（7.7%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
見学者（n=21）	3（11.5%）	11（42.3%）	6（23.1%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1（3.8%）
計	6（23.1%）	13（50.0%）	6（23.1%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1（3.8%）

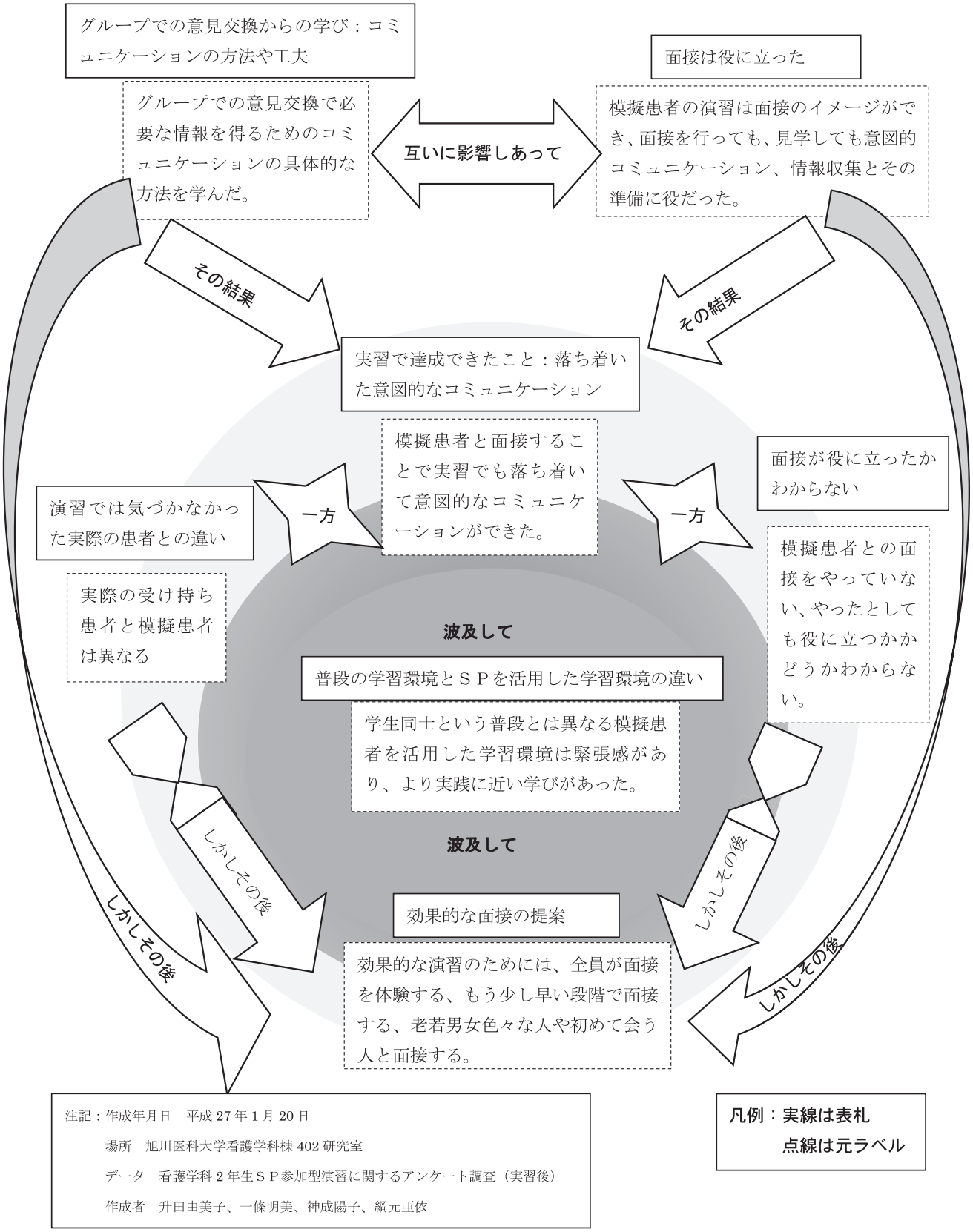

図 2　模擬患者を活用した面接演習が初めて患者を受け持つ実習に役立った理由

を想定し、あらかじめ情報収集したい内容と方法を考え演習に臨んだ。各グループに１回 SP との面接が行われ、その後学生がお互いに患者役となり、ロールプレイを実施したことでこれらの学びを得たと考える。

藤崎は、ロールプレイは模擬患者などを用意しなくても自分たちだけでできるもっとも簡単なシミュレーションであることや全体のリアリティや深まりが演じる学生たちの経験や能力に依存するのでロールプレイ全体が平板な深まりのないものになりやすいことを述べている[4]。しかし、患者としての体験を模擬体験できるというのはロールプレイのみにある利点であり、リアリティよりは患者側へのまなざしの転換による気づきが重視されている[5]とも述べている。我々は看護技術教育でコミュニケーション技術だけでなく他の技術でも、患者体験による患者の立場を理解したうえでの援助が重要と考える。学生はこれまでの技術演習でも学生同士が患者役となり、患者の立場でお互いの技術を評価しあい学んできた。しかし、この面接演習は１年次の技術演習で用いられたような単純な設定ではない。看護過程を用いて紙上事例の患者理解を深めてきた結果、上手な学生が演じる患者役を通して患者理解の必要性に気づいたり、たとえ患者役が学生であったとしても会話のようなインタビューが大切だと気づいたりしたと考える。これらの気づきや学びが波及し、「本当の患者へ接する良い学習」となり、「コミュニケーションの傾向がわかったので臨床に行った時の自信につながった」と体験や学びを実習に関連させて考えた結果と推測する。今回実施した SP 参加型演習は、学生同士のロールプレイでは得られにくい全体のリアリティや深まりを、SP を活用したことで緊張感や臨場感ある学習環境となり、学びを深めたのではないかと考える。

一方、間瀬らは SP を用いて臨場感を意識して作成した学内演習プログラム評価の研究で、SP に援助を行うのは緊張と戸惑いを伴い学生の負担が大きい可能性がある[6]と述べている。SP にインタビューや援助を行う学生の緊張は、集団の規模によるのではないかと考える。集団の規模が大きいほど学生の緊張は高くなる。今回の SP 参加型演習は３～４人のグループで実施した。この規模の学習環境が適度な緊張を保ち、演習後だけでなく実習後も印象に残り様々な学びに波及したと考える。

２．学習意欲の向上への影響

SP 参加型演習は学生の学習意欲の向上をもたらした。この意欲向上は「たくさんの方に支えられていると実感し、これからの学習への意欲が増した」とあるように学習を支える環境に刺激されたものである。さらに SP からのフィードバックには、ポジティブな要素とネガティブな要素が含まれており、ポジティブなフィードバックが学生の学習意欲向上に関与していると考える。なぜなら日高は、ほめられた経験と看護学生の学習動機づけに及ぼす影響の研究で、行動に対してほめられた経験が多いほどより内発的な動機付けが高いことを報告している[7]。ポジティブなフィードバックは学生にとってほめられた体験となり学習意欲が向上したのではないかと考える

一方、森谷らは看護系大学生における SP 参加型演習の研究で、演習後学習意欲を示す得点が高くなったと報告しており、学生は SP による演習を通して、何を学習すべきなのかというイメージが明確になったのではないか[8]と述べている。学生の学習意欲が向上する動機づけとして、具体的な行動や課題の解決方法がわかることは重要な要素であり、SP からのフィードバックやグループでのディスカッションが有効であったと考える。演習後では『演習は実習に向けてよい学習』『臨床・将来をイメージ』といった漠然とした認識であった。しかし、実習後に SP 参加型演習を振り返ることで「模擬患者の演習は面接のイメージができ、面接を行っても、見学しても意図的コミュニケーション、情報収集とその準備に役だった」と認識された。SP からフィードバックを受けられるのは SP と面接をした学生だけであるが、見学をしていた学生は SP と代表学生の面接およびフィードバックを冷静に観察し、客観的に受け止め、自分のコミュニケーションに反映させられたのではないかと考える。

３．面接演習への示唆

三宅、久津見は SP との面接実施者と観察者に調査を行った結果、観察者と実施者で学びが異なる[9)10)]と報告している。本研究では、SP 参加型演習の満足度や実習での役立ち度を調査しているが、面接体験の有無に分けてその影響や理由を分析していない。今後、SP との面接体験の有無による影響の検討が課題である。今回の調査では演習後は９割以上、実習後は７割以上の学生が面接体験の有無に関係なく満足あるいは実習

に役立ったとしていた。それは、単に観察者としてSPと代表学生の面接を見学するのではなく、学生が患者役であっても全員がロールプレイを体験したこと、看護過程を展開した紙上事例をシナリオとしてSPが演じたこと、紙上事例の看護計画を立案しそれに基づく情報収集とコミュニケーションの方法をグループで検討したことによると考える。

一方、学生は実習で受け持ち患者と接することで、実際の患者とSPの違いに気づいた。また、SPとの面接を行っていない、やっとしてしても役に立つかわからないとしながらも、「全員が体験する、早い段階で面接する、色々な人と面接する」などの『効果的な面接の提案』があった。これはSP参加型演習の効果を認識した上での提案ではないかと考える。

【結　論】

SP参加型演習による学びの構造および実習への影響は、以下のとおりである。

1．SP参加型演習後は、SPが存在することの緊張感、リアリティさにより、臨床や将来をイメージでき学習意欲が向上した。
2．学生は、実習で意図的なコミュニケーションができた一方、受け持った患者とSPとの違いに気づいた。
3．SP参加型演習は、SPとの面接を体験しても見学のみであっても、実習での意図的コミュニケーションに役立てられた。
4．SP参加型演習はSPを活用しただけでなく、看護過程を通しての患者理解や学生同士のロールプレイが学びに影響していたと考えられる。

【引用文献】

1）清水裕子：看護教育における模擬患者（SP：Simulated Patient・Standardize Patient）に関する研究の特徴，日本保健科学会誌，10（4），215-223,2008.
2）正木治恵：看護学研究における質的統合法（KJ法）の位置づけと学問的価値 , 看護研究，41（2），3-10, 2008.
3）山浦晴男：質的統合法入門考え方と手順，医学書院，2012.
4）藤崎和彦：日本のPBLチュートリアルと医療コミュニケーション教育の現状と課題，日本保健医療行動科学会年報，Vol. 19, 1-25, 2004.
5）4）再掲
6）間瀬由記、小山眞理子、水戸優子他：臨場感ある学内看護演習プログラムの学生による評価 , 神奈川県立保健福祉大学誌，9（1）, 2012.
7）日高優：ほめられた経験が看護学生の学習動機づけに及ぼす影響，医学教育，47（3），161-169, 2016.
8）森谷利香：看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究，千里金蘭大学紀要，8，191-199, 2011.
9）三宅由希子：模擬患者参加型演習の教育効果について，日本看護研究学会雑誌，35（3），256, 2012.
10）久津見雅美、森谷利香、竹村節子：領域別臨地実習に向けた模擬患者の演習による看護系大学生の学習意欲への影響- 演習実施者と観察者での教育効果の違い-, 千里金蘭大学紀要，10, 55-62, 2013.

投稿論文

Student learning through interview practice using a simulated patient
― Comparing pre- and post-training responses with the qualitative synthesis method ―

ICHIJO Akemi，KANNNARI Yoko，TUNAMOTO Ai，MASUDA Yumiko

This study aims to understand the structure of learning among nursing students by investigating the influence of practice with simulated patient on learning, immediately after the practice and after completion of the clinical training.

We analyzed reports submitted by students in the second year of a nursing college who agreed to participate in the study. The reports were analyzed with the qualitative synthesis method (KJ method): for 44 students immediately after the practice (74.6%); and for 26 students after completion of the clinical training (44.1%).

We introduced practice with simulated patient in the lecture of the nursing process where a simulated patient played the role of patient for cases described in the class material, and we conducted interviews to collect data. In the practice one student interviewed the simulated patient and other students played the roles on each other.

After the practice with simulated patient, the students felt tension and had a sense that the conditions were realistic due to the presence of the simulated patient. This practice gave the students ideas of what clinical settings are like and for their future work, in the process this improved learning motivation. After the training students noticed differences between the patients they had been in charge of and the simulated patient, and that they were able to communicate with good effect in the practice because the practice with simulated patient created a different learning environment from what they are accustomed to.

Key words　nursing student, practice with simulated patient, clinical training, the qualitative synthesis method (KJ method)

*旭川医科大学　英語